

東洋陶磁学会第40回大会 研究発表要旨

「長崎の近世陶磁器の新たな調査成果」

2012年11月23・24・25日

長崎歴史文化博物館

<記念講演>

長崎の近世陶磁の概論 大橋 康二

<研究発表>

長崎の陶磁① 平戸焼—三河内皿山を中心に— 松尾 秀昭

長崎の陶磁② ヨーロッパ所在の平戸・三川内焼 松下 久子

長崎の陶磁③ 現川焼 扇浦 正義

長崎の陶磁④ 中尾上登窯の興廃に見る

近世・近代の波佐見窯業 中野 雄二

長崎の陶磁⑤ 長与焼 中村 幸

長崎の陶磁⑥ 亀山焼 山口 美由紀

長崎を通じた海外輸出① 出島の調査 山口 美由紀

長崎を通じた海外輸出② オランダ東インド会社による公式貿易の日本磁器
—バタヴィア・オランダでの取引に関する新史料— 櫻庭 美咲

長崎を通じた海外輸出③ 欧州に輸出された肥前磁器の漆装飾について
—装飾技法と加飾地に関する考察— 松下 久子

長崎を通じた海外輸出④ 欧州に輸出された肥前磁器
—歴史的コレクションの形成と絵画資料からみる— 藤原 友子

東洋陶磁学会

共催：長崎歴史文化博物館 後援：長崎県

長崎県の近世陶磁器は、佐賀県側の陶器（唐津焼）と磁器（伊万里焼）との深い関わりの中で特色ある陶磁生産が展開した。磁器の波佐見焼、平戸焼、長与焼、亀山焼、陶器の現川焼などがある。

波佐見諸窯では、有田とほぼ同じ頃に磁器生産が陶器窯の中で始まったが、1630年代頃から青磁中心の生産がみられる。この青磁生産は、1650年代頃に有田同様、中国龍泉窯の青磁技術の影響を受けたものになる。このような方法で17世紀後半に作られた青磁の大皿類は国内だけでなく、有田磁器とともに東南アジアに多数輸出された。こうした輸出は、1684年中国の内乱が終息すると、市場を中国に奪回され、その結果、波佐見は18世紀に入ると、それまで磁器の食器を買えなかった人々向けの安価な磁器生産を行うようになる。18世紀中葉にはいわゆる「くらわんか手」と呼ばれる碗・皿を大量生産し全国津々浦々に流通させる。この大量生産の技術の一つとして、大規模な登窯があり、全長百数十メートルの巨大な窯が作られる。

平戸藩松浦家の領内では、陶器生産が慶長（1596～1615）年間頃の胎土目積段階から始まる。磁器は平戸市の窯で1630～40年代頃から始まるが、窯跡出土品からは安定した磁器焼成に成功したとは言い難い。窯跡出土品と記録などから、1651年頃、平戸市中野から佐世保市三川内に平戸藩の援助を受けた磁器窯は移ったと推測される。近年、平戸藩松浦家から徳川將軍家への例年献上の一品に「平戸焼物」が含まれていることが明らかにな

ったが、それがどのようなものかは従来、まったく不明であった。ところが、三川内皿山役所跡の調査で1650～60年代頃の優れた磁器が多数出土し、また、平戸藩松浦家の江戸屋敷である東京台東区向柳原町遺跡の発掘調査で、元禄頃に推定される園池造成土からたくさんの平戸焼が出土し、その中で特殊な作りの水注や香炉など多様な染付が出土した。將軍家の食器であろう鍋島焼に対して、平戸焼の献上品としては、こうした水注、香炉などが想定される。

長与町の長与窯は大村領の磁器窯である。この長与窯が注目されるのは1792年の記録から推測される三彩である。その窯の調査で三彩の陶片が出土している。長与三彩は磁胎であり、この技術は中国・景德鎮窯の三彩の影響と考えられる。

江戸後期の磁器窯として長崎市の亀山焼があり、独特の優れた技術による染付を作り出した。

長崎県内の陶器生産は、江戸前期には佐賀県側の唐津焼生産の流れの中で、食器や壺・甕などの生産が行われた。そうした中で独特の陶器が長崎市現川で17世紀末～1749年頃に焼かれた。ここは佐賀藩「御親類同格」の諫早家領であった。比較的多くの記録が残っており、伝世品も多いため、早くから紹介されてきた。発掘調査によって、窯の技術、製品内容などが明らかになった。

以上のように、長崎の陶磁器は肥前陶磁器の技術系譜の中で作られたが、それぞれの窯場で工夫が行われ、特色ある陶磁器が作られた。

《研究発表》 長崎の陶磁① 平戸焼—三河内皿山を中心に—

松尾 秀昭

日本各地において出土する遺物または伝世品の中に、多くの肥前陶磁が報告されている。その肥前陶磁の中には、長崎県佐世保市域で生産された「平戸焼」や「三河内焼」が含まれることが、近年の調査研究の進展により明らかになりつつある。

しかしながら、三河内焼の生産遺跡に関する調査は1970～80年代に開始しているが、それ以降、事例が散発的かつ全体構造の解明に至る事例は少なく、他藩領における生産遺跡の調査研究に依拠する部分が極めて多い。

平戸藩において生産された平戸焼や三河内焼については、1598年の朝鮮帰陣に伴って来日した陶工によって始められたとされ、特に三河内焼はその中の巨関や高麗媼が開窯に大きく関与している。巨関（日本名 久兵衛）は、平戸藩主松浦鎮信の命により平戸島内に中野窯を開窯し、薄手で繊細な染付を生産した。中野窯は1630年頃に開窯したとされる磁器専窯であり、平戸藩直営の御用窯であった。その後、巨関の子の今村三之丞は唐津・有田・波佐見を経て三河内へ移住し、三河内皿山代官及び御細工

所棟梁に任命され、三河内における磁器生産体制の確立に努めた。一方の高麗媼（日本名 中里エイ）は、唐津藩（佐賀県伊万里市）椎の峰で製陶したのち三河内へ移住し、子の中里茂右衛門とともに長葉山窯の開窯など三河内における陶器生産の技術向上に影響を及ぼした。

17世紀中葉以降、三河内は近隣の針尾島や天草の陶石の発見に伴い、平戸島から三河内へ陶工を移動させると同時に、代官所や出張所等の生産管理体制の強化を図ったことから、磁器生産の試作から確立へ急速に移行した。このような生産管理体制を背景とし、次第に純白で繊細な文様の、つまり上質染付の生産ができるようになり、平戸藩御用窯として隆盛を誇ることとなり、献上用及び

禁裏用陶磁器の生産地としての地位を盤石にした。平成12・13年に実施した三河内皿山伝代官所跡や三川内東窯跡の発掘調査においては、献上用と考えられる遺物が多く出土し、古文書資料と一致する成果が得られた。

しかしながら、近世三河内焼を生産した江永・木原・三河内の三皿山における窯跡の発掘調査事例は少なく、陶磁器編年や各窯跡（皿山）の差異について、検証すべき事象が山積しているため、これまでの三河内焼窯跡の考古学的手法による調査成果を再整理し、平戸藩における生産体制及び流通構造の解明の基礎資料とするものである。

長崎の陶磁② ヨーロッパ所在の平戸・三川内焼

松下久子

平戸焼は、国内向け製品のイメージが強いが、江戸後期から明治期にかけてヨーロッパへ数多く輸出され、今なお各地に伝世している。代表的な所蔵館としては、ライデン国立民族学博物館、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館（以下、V&A美術館）、大英博物館、ギメ美術館、ナールステク博物館、フェレンツホップ東洋美術館等が挙げられる。各館の収蔵品は、複数の個人コレクションが適宜収蔵された場合が多く、江戸期の平戸焼と明治期の三川内焼が混在しているのが現状である。それらの中から江戸期の平戸焼を抽出して概観すると、いくつかの特徴を有するグループを指摘できる。

まず最初に挙げられるのは、輸出品の主力となった薄手磁器（卵殻磁器）類である。平戸焼のヨーロッパ向け輸出は1830年に始まり、オランダ人が好むという薄手碗の製作が積極的に進められた。1837年にはその薄さが紙に例えられる程に完成度を高めたという。薄手磁器の輸出は盛況を呈し、三川内山の商人や藩が設置した平戸焼物産会所だけでなく、1840年以降は有田の商人久富与次兵衛や田代紋左衛門も輸出を手がける。一方、1850年代以降の新聞広告や旅行記、1862年のロンドン万博に出品された卵殻磁器を絶賛する新聞記事等からは、消費地における薄手磁器の認知度と評価の高まりがうかがえる。

次に、来日した人物によって日本文化や製陶技術を紹介するための標本的な資料、あるいは土産物としてヨー

ロッパへ持ち帰られたグループがある。中でも注目されるのは、ライデン民族学博物館に収蔵されているシーボルトやブロンホフ、フィッセルの収蔵品である。収集の下限が1829年であるため、輸出開始以前の国内向け製品の様相がうかがえる。平戸焼の薄手碗はまだ見られず、染付製品や細工物で構成される。

三番目は、博物館関係者の目を通して収集された平戸焼が挙げられる。V&A美術館は、1876年のフィラデルフィア万博に出品された日本の陶磁史を一覧する216点の一括資料を購入した。その中には染付の皿や香炉、置物など5点の平戸焼が含まれる。大英博物館には、A.W. フランク스가収集した平戸焼が少なくとも55点収められている。その中には、33点の根付、7点の熨斗押さえ、透彫の火屋をもつ香炉などがあり、特に細工物の数の多さが目立っている。

以上から、ヨーロッパでは19世紀を通じて、平戸焼の薄手磁器や細工物の繊細な技術が特に注目され、高く評価されていたと言える。明治期には、殖産興業・輸出振興政策を背景に、技巧を凝らした多様な細工物や薄手磁器、染付の三川内焼が数多く輸出され、万博においても高い評価を獲得することになる。その根底には、19世紀前半からヨーロッパで培われた平戸焼に対する高い評価があり、明治期の飛躍の礎になったと思われる。

現川焼窯跡は、長崎市中心部から北東約7kmの現川町に位置する。江戸時代に佐賀藩親類同格の諫早家領内で焼かれた陶器である。

諫早家日記（日新記）によると、元禄4年（1691）に田中刑部左衛門が有田から諫早領の矢上に移住して焼物を作りたいとの願いが出されており、約60年後の寛延2年（1749）にはすでに廃窯になっていたことが知られる。

窯跡は鬼木窯と観音窯が確認されており、製品の特徴は、陶器でありながら磁器のように薄く成形され、刷毛目文様を主体に洗練された作風をもつ。刷毛目文様を施した後に染付や錆釉、釘彫りや白泥などを用いてさらなる装飾を加えた高級食器も多く、俗に「九州の仁清」と評される。

現川焼の研究は、昭和初期から雑誌に掲載されるようになり、昭和15年（1940）には諫早市の安勝寺住職・正林陶城氏により『現川焼の研究』として単行本が出版されている。戦後になっても現川焼の研究は継続され、近年では博物館や美術館で「長崎の古陶磁」として現川焼を含めた展示会が催されつつある。

現川焼の発掘調査は、昭和57年（1982）の長崎大水

害の折に、河川の氾濫によって物原や遺物包含層が発見されたことが契機となった。調査地点は鬼木窯跡と山川地区に分けられる。鬼木窯跡では焼成室や物原が確認された。山川地区では窯体は検出されなかったが、遺物包含層から各種の生活用具とともに現川焼製品が出土した。その中には現川焼とみられる低火度焼成による緑釉や三彩製品なども含まれていた。

昭和38年（1963）に長崎県史跡に指定されている観音窯は、窯跡の範囲や焼成室数などが不明であったため、平成11年（1999）に範囲確認調査を実施した。その結果、6室以上の焼成室をもつ連房式登窯であることが確認された。さらに窯尻から大量の素焼製品が出土し、本窯では最後部を素焼室として使用していたことが判明した。

現川焼の流通は諫早家領内のほか、京阪方面へ出荷していたことが諫早家日記から知られる。近年の近世遺跡の発掘調査では、江戸や関西をはじめ、各地からの出土例が報告されている。長崎では市中の屋敷跡をはじめ、出島和蘭商館跡や唐人屋敷跡からも出土しており、広範囲に流通していたことが判明しつつある。

長崎の陶磁④ 中尾上登窯の興廃に見る近世・近代の波佐見窯業

中野雄二

長崎県波佐見町内で生産されているやきもの一波佐見焼一は、約400年前の陶器生産で幕を開ける。その後、大村藩の庇護のもと、17世紀初頭には磁器生産に成功し、17世紀前半代には優れた青磁の生産、17世紀後半代には海外輸出品を生産する。そして、18世紀以降、波佐見では、「くらわんか手」と呼ばれる江戸期庶民層向けの安価な磁器を、巨大な登り窯を用いて大量に生産した。明治期以降も基本的に庶民向けのやきものを生産し続け今日に至り、現在、和食器の出荷額は長崎県下で最大、全国でも第3位の実績を誇っている。

今回の発表で取り上げる中尾上（なかおうわ）登窯は、波佐見窯業の中核的な窯場である中尾地区に所在する。17世紀中葉の青磁生産を皮切りに、17世紀後半代には「雲龍見込み荒磯文碗」などの海外輸出品を生産、18世紀以降はいわゆる「くらわんか手」の大量生産を行った。

安政3年（1856）頃の文献記録と発掘調査からは、当時、部屋数33室、全長160mに及ぶ世界第2位の長大な登り窯であったことが推測されている。明治期に入り規模は縮小するものの生産は継続され、最終的に昭和4年（1929）頃廃窯した。その後、窯の跡地は畑地・宅地として利用されていたが、平成12年（2000）の国史跡指定を機に保存整備が計画され、現在、整備工事が進められている。なお、発掘調査は平成3・18・19・23・24年度に実施されている。

今回の発表では、文献史料と最新の発掘調査成果を元にして、約280年の長きにわたり操業していた波佐見を代表する窯である中尾上登窯の成立・発展から衰亡に至るまでを概観していく。一つの窯の「生涯」を通し、近世・近代における波佐見窯業の諸様相並びにその特質を紹介していきたい。

長崎の陶磁⑤

長 与 焼

中 村 幸

長与焼といえば、色彩豊かな長与三彩が有名であるが、これとは対照的に波佐見焼の流れを汲む染付などの素朴な日用品も知られている。

これまでの長与焼に関する研究については、古いものでは戦前の1930年代より研究がなされている。その一つに林源吉氏の『長與三彩と長與の染付』（1937）があり、『大村郷村記』に基づいて長与窯の開窯・廃窯の時期について論考している。後に続く論文も、多くがこの『大村郷村記』を基軸として研究している。長与三彩についても、『大村郷村記』の「珍敷焼物」の件が、多くの研究者の論考の基礎となっているが、あくまでもこの「珍敷焼物」が長与三彩を指すのではという推測の域を脱し得ない為、様々な角度からのアプローチがなされ研究は複雑を極めてきた感がある。そして、この資料の他に制作年や作者を記した確たる古文書等が発見されていないこともあり、出土遺物と伝世品とを比較するなど型式上の分類等から制作年を類推しているもの等もある。また、長与三彩のルーツについては、長与が長崎に近い立地にあることから、海外からの影響を指摘する論考も少なくない。近年、下川達彌氏による天草・上田家の『近国焼物大概帳』の分析によって、交趾三彩が長与三彩出現のきっかけとして位置づけられ、かつ『大村郷村記』の「珍敷焼物」が長与三彩である可能性がより一層高まるとして、戦前から続く研究が一步大きく前進した形となった。

長与窯で初めて本格的な発掘調査がなされたのは、昭和48年である。この調査は、物原の2か所を掘ったもので、出土品の殆どが染付であり、総計2,750個の出土遺物を様々な角度から分類している。この時の調査では長与三彩は出土していない。ただ、出土した磁器の生地が長与三彩伝世品の生地と一致することがわかった。次いで平成5年に行われた調査では、初めて窯の本体に調査の手が入り、窯の水平全長は115mで、窯体は25室程という事が明らかになった。出土した製品は、形態や文様から第二期のものと考えられ、第一期創窯時の関連遺構や、長与三彩の出土はなかったと報告している。

平成17年に実施した調査は、上記2回の調査から長与三彩は別に存在する窯で焼かれた可能性が高いと推測され、長与窯に隣接する渡辺氏（第三期操業時の渡辺氏のご子孫）宅の敷地内を調査させて頂いた。一番大きな成果は、長与三彩の生産地でこそ出土する失敗品が発見されたことであった。この調査では三彩を焼いたとされる窯は発見されなかったが、大量の素焼片が出土したことから、隣接する登窯の物原からの流れ込みだけではなく、独立した別個の工房、つまり素焼窯のようなものがあったのではと考えられる。この素焼窯を使って三彩を焼いた可能性を説く見解もある。

登窯との総合的な調査により、更なる長与三彩の謎の解明と長与窯業の全容をつかむことが今後の課題である。

長崎の陶磁⑥

亀 山 焼

山 口 美由紀

亀山焼、その製品は海外貿易港長崎の粋を集約した焼物である。2010年NHK大河ドラマにて放送された「龍馬伝」、本番組中にて、坂本龍馬率いる亀山社中の同士らが盃を傾ける場面で、再々登場したのが復刻された亀山焼の酒器であった。本窯に近い場所に、亀山社中は本拠を構え、龍馬愛用の亀山焼製飯碗が伝世するなど、龍馬と亀山焼に、所縁があったことから印象的に用いられた演出であった。

亀山焼は、文化元年（1804）オランダ人がたくさんの水瓶を必要としたことから、文化4年（1807）大神甚五平他3人が長崎奉行所から産業元手銀を借用し、この頃

から焼成が開始された。当初は東南アジア向けに輸出する陶器が製作されていたが、文化9年（1812）から窯の改造に着手し、文化11年（1814）に白磁染付の製作に転換し、焼成が始められた。以後、「蘇州土亀山」や色絵を含む数々の名品が製作された。しかしながら、天災による被害、焼き損じ等による経営難が続き、慶応元年（1865）に閉窯された。

この間、モチーフに東洋あるいは西洋の文物が取り入れられ、数々の名品が創出された。当代の文人墨客が絵付けを行なった作例も残る亀山焼には、当時の長崎の空気が映し出されている。

平成8年、亀山焼窯跡の一部に所在した地元公民館の建替えに際し、長崎市による発掘調査が行なわれた。その結果、発掘調査及び地形から推定される窯体は全長約55m、焼成室11室からなる連房登り窯であることが判明した。調査地点は、この登り窯の下半部にあたり、焼成室の規模は幅7m、奥行4.5mであった。物原を掘削する機会には恵まれなかったが、現在も周辺の丘陵に位置する民家の一面に物原が存在すると伝えられる。室内から

出土した磁器片には、わずかに上手の製品が見られるものの、その大多数は中級もしくはそれ以下の製品であり、廃窯直前の窯の状況が示されていた。

本報告では、記録に残る亀山焼の操業、発掘調査によって明らかになった窯の規模などの基本的な事項に加え、名品として現代に伝えられる伝世例について紹介する。その中から、長崎の一時代の様相を映し出したと言える亀山焼の実態と魅力について、言及したい。

長崎を通じた海外輸出① 出島の調査

山口 美由紀

出島の復元整備事業に伴い、長崎市によって平成8年から継続的に実施されている「国指定史跡 出島和蘭商館跡」の発掘調査は、本年度で15年目を迎えた。これまでの調査で、近世陶磁器を主体とする約67万点に及ぶ膨大な数の資料が出土しているが、平成13年より本事業を担当し、出島の発掘調査に従事するなか、これらの多様な出土資料を手にする機会を得た。

約15,000㎡の小さな築島であった出島では、その地が閉鎖された空間であったことから一島まるごとが街としての機能を過不足なく有している。このため島内には、オランダ商館員の居住空間や、蔵などが建ち並ぶ貿易のための空間、日本人役人の管理施設が設けられた公的な空間、また庭園や菜園、家畜小屋が設けられた空間など、様々な役割を担った区域が形成されている。発掘調査によって出土する資料群も、当然のことながら、その出土地点・区域が持つ機能によって、内容や数量、組成等が変化する。現在、出島の西側から中央部までの発掘調査が実施されたことにより、絵画史料や文献史料から理解されているそれぞれの空間が持つ本来の役割と、当該地点からの遺物の出土状況を照らし合わせることによって、さらに進んだ土地利用について言及することが可能となった。

これらの遺物の出土状況の把握により、廃棄された陶磁器片で構成される出土品について、廃棄の裏側にある事情を汲み取ることが出来る。具体的には、火災時における同一年代資料の大量廃棄、何らかの輸出時の問題による同一商品の大量廃棄、日々の生活の中で消費された生活雑器の廃棄などが挙げられる。このような出土状況の分類によって、海外へ輸出された肥前有田製磁器の一時期の特徴を捉えることが可能であろう。

また、陶磁器片の出土状況全体を概観すると、日本国内において日常的な使用例が多い生活雑器が多数出土している。このような資料群についても、居住者や出入りの日本人役人など、使用者の構成や身分の推測を行うことによって、その位置付けを解明する糸口があるものと思われる。

現在、復元された江戸時代の建物「カピタン部屋」の2階大広間では、“再現されたオランダ商館員の宴席”が展示されている。復元の対象とした年代は19世紀前半であり、食器は西洋の銅版転写陶器を中心に用いている。17～18世紀代の出島の宴席の食卓についても、これまでの発掘調査によって蓄積された成果に基づき、想定される時代ごとの変遷につき、試みたい。

長崎を通じた海外輸出② オランダ東インド会社による公式貿易の日本磁器

—バタヴィア・オランダでの取引に関する新史料—

櫻庭美咲

オランダ東インド会社が作成したオランダ東インド会社に関する文書、すなわち「東インド会社文書」の原本

の記載に基づいて、オランダ東インド会社の公式貿易について考察する。公式貿易による肥前磁器の輸出は、ユー

ロシア大陸やアジアの島嶼部を含む多くの国々に所在するオランダ東インド会社の商館に向けられていた。

輸出量が最も多いバタヴィアへは1656年より1757年までに515,391個、次に多いオランダへは1657年より1683年までに228,008個が輸出されたが、輸出先での状況はまだほとんど知られていない。今回は、バタヴィア、オランダを中心に、いまだ未知の部分の多い輸出先での取引に関する新史料を紹介してゆく。

まず、バタヴィアについては、「バタヴィア経理局長文書」という「東インド会社文書」の史料に記されたバタヴィアの商館の部局の販売の記録から現地での取引の詳細を読み取ることができる。この史料を用いて、バタヴィア

で販売されるだけでなく、一部はアジアの数多くの地域へ再輸出されていた、バタヴィアを舞台におこなわれた日本磁器の取引について検討する。

オランダへの公式貿易による日本磁器の輸出は27年間という短い期間に急ピッチで発展し終息した。その原因をオランダ東インド会社の従業員による私貿易や1680年代初頭の中国磁器の輸出再開に求める見方は、推定としてすでに一般化している。本発表では、なぜオランダ東インド会社が肥前磁器をオランダ向けの商品として扱わなくなったのか、その原因の真相に係わる具体的なデータを示しつつ、日蘭間の取引のリアルな実態を描写してゆきたい。

長崎を通じた海外輸出③ 欧州に輸出された肥前磁器の漆装飾について

—装飾技法と加飾地に関する考察—

松下久子

17世紀末から18世紀前半にかけて欧州へ輸出された肥前磁器の中に、漆装飾磁器と呼ばれる一群がある。磁胎に漆などを用いて装飾を加えたもので、染錦や金襷手が全盛の時代にあって、異質で斬新な印象を与える。この肥前磁器の漆装飾技術については、ドイツの研究者達によって構造や材料の成分分析が行われているが、具体的な装飾技法や加飾地についてはこれまで明らかにされていない。そこで、現存する当時の漆装飾磁器のうち、現地調査や図録等で確認できた98点をもとに、具体的な装飾技法と、加飾地について考察したい。

肥前磁器の漆装飾には、高蒔絵のような伝統的な漆工技術を主に用いたものと、漆工技術とはかけ離れた大胆で迫力のある表現手法を用いたものが見られる。前者は比較的平面的で、後者は立体的である。それらの表現手法をつぶさに観察すると、様々な要素で構成されていることがわかり、技術的な観点から分類すると、①漆塗(黒・赤)、②漆箔、③蒔絵・高蒔絵、④漆絵・密陀絵、⑤岩絵具による彩色、⑥高いレリーフ状装飾、⑦立体的な地紋、⑧砂目地、⑨異素材の組合せ、といった9つの要素に分けられる。

これらの要素がどのような技術に基づいているのか、技術的出自を見ていくと、漆工技術(①～④)、絵画技術(⑤)、塑造装飾技術(⑥～⑧)金工・木工技術(⑨)に

分けられる。国内の工芸あるいは美術分野の技術的要素を組み合わせることで、磁器を装飾するための独特の表現手法が形成されている。

また、装飾の技術的変遷について磁胎との組合せで検討すると、始め漆工を基本とした蒔絵風の装飾(①～④)が行われるが、その後は漆工技術を残しつつ、立体的で迫力のある表現手法へと変化を見せることが看取される。

次に、漆装飾の加飾地について考察する。漆装飾の表現手法に見られる前述の漆工技術や絵画技術、金工技術、木工技術は、国内の都市であればどこでも見られる技術である。一方、斬新な印象を作り上げている独特の立体的で色彩鮮やかな表現手法は、その出自を木像の塑造装飾技術に見出すことができる。これは、17世紀の黄檗宗渡来とともに長崎にもたらされた仏像彫刻における装飾技術の一種である。長崎では、そのような技術をもつ仏師が17世紀から活躍し、現存する当時の仏像に類似点を多く見出すことができる。また、有田で焼成した磁器を長崎から輸出するのであれば、長崎で加飾するのが合理的と思われる。

以上より、肥前磁器の漆装飾技術は、国内の漆工を含む工芸・絵画技術および中国系仏像の塑造装飾技術の要素を組み合わせられて作り上げられた独特の装飾手法であり、長崎で加飾された可能性が極めて高いと考えられる。

長崎を通じた海外輸出④ 欧州に輸出された肥前磁器

—歴史的コレクションの形成と絵画資料からみる—

藤原友子

欧州に輸出された肥前磁器に関する研究は、既に1960年代から西田宏子氏はじめとする日本の研究者を嚆矢として、主にオランダ、イギリスの研究者の功績により、およそ半世紀にわたる情報の蓄積をみている。研究が進むとともに、イギリス、オランダ、ドイツに伝世する歴史的に重要な肥前磁器のコレクションの里帰り展が開催され、また、肥前磁器の里帰り品が各地で収集されるに至り、欧州へ輸出された肥前磁器の全体像は今や明確な輪郭を得ているものと思われる(註1)。

有田には唐阿蘭陀向け焼物商売をする商人が存在し、出島で通詞を介した商取引が行われた。交渉は長崎が舞台であり、オランダ商人と出島に出入りした日本人商人は、当時の制限貿易システムのなかで肥前磁器を扱わざるを得なかった。オランダ東インド会社によるオランダ本国からの注文による公式な取引が行われた一方で、商館長を含む商館員の私貿易品としての取引が大量に存在した(註2)。また、断片的ではあるが、記録には、長崎の唐人貿易による肥前磁器の輸出には、欧州向けと考えられるものがある(註3)。肥前磁器は、長崎を発送地とし、オランダ商人と中国商人の貿易ネットワークによって欧州まで運ばれた。

肥前磁器の輸出が開始された1659年頃の欧州の陶磁器市場には、中国磁器が既にもたらされており、王侯貴族や富裕な商人層の生活空間に浸透していた。その様子は、フランドルやネーデルラントの風俗画や静物画に描かれている。また、欧州各地に存在する王侯貴族の肥前磁器のコレクション(とりわけ現在のドイツに所在するコレクション)の形成には、オランダとの姻戚や交易が背景にあった。

ここでは、輸出された肥前磁器について、欧州の歴史的コレクションの形成と絵画資料から、年代の指標となる肥前磁器と、その製品事例によって、欧州に輸出された肥前磁器の時代変遷について考察を試みたい。

註1 欧州市場への肥前磁器については、18世紀後半から幕末期の肥前磁器も、イギリスの骨董市場では見られるということが紹介されている。Irene Finch, *The Lost Century*, 1998 また、中国商人の東南アジア貿易ルートによって発送され、スペイン船が太平洋横断ルートによって南米を経由し、スペイン本国へと運んだ肥前磁器の存在についても近年調査研究されている。これらの研究は、欧州市場に輸出された肥前磁器の一部を構成するものとして注目される。田中恵子「メキシコ、キューバ、スペインでの4個の肥前染付チョコレート・カップの発見—17世紀のスペイン貿易による知られざる肥前磁器の交易ルート」『世界に輸出された肥前陶磁』九州近世陶磁学会2010年

註2 山脇倂二郎「唐・蘭船の伊万里焼輸出」『有田町史商業編I』1988年pp.385-402、Cynthia Viallé, *Company Trade and Private Trade in Japanese Porcelain in the Seventeenth and Eighteenth Century*, 九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第3号2007年

註3 『陶蛮貨物帳』影印本 内閣文庫 1980年、櫻庭美咲「オランダ東インド会社文書にみる17世紀肥前磁器輸出の史料分析—バタヴィア=アジア域内の流通を中心に—」九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第3号2007年p.177

東洋陶磁学会:

〒102-0074 東京都千代田区九段南2-1-30 イタリア文化会館ビル4F KSフロア

TEL./FAX. 03-3239-1277 <http://homepage3.nifty.com/toyotoji>